

リレーコラム 38

キャリアの積み方—私の場合

ミャンマーの子どもたちとともに

ミャンマーコンパッションプロジェクト

荒川 泰子

「僕のことを愛している？」と見つめる6歳の男の子がきっかけでした。初めて訪問した孤児院で見つめられた瞳が忘れられず、ヤンゴンに来て13年。孤児院や子どもの施設がヤンゴン周辺には300以上あります。民族間の内戦や自然災害、親の離婚や経済的な困難さで教育が十分に受けられないなどの様々な理由で子どもたちは住み慣れた村から送られてきます。時にはごみ箱に捨てられてしまった新生児もいます。ミャンマーコンパッションプロジェクトは、クリスチャンの地元の医師が中心となり、こうした子どもたちの健康診断や診療、健康教育をするために活動しています。施設にどんなにたくさん子どもたちがいても、一人一人話をしながら診察します。診察を受けるのは初めての子どもたちも少なくありません。施設を訪問するのも子どもたちの生活環境を見ることができるからです。

小児科を選んだのは、一人の子どもを家庭や環境を含め全人的に見ることに魅力を感じたからです。群大小児科の研修を経て、佐久病院での地域との関係を大切にする診療から学んだことが、今のミャンマーでの活動にも生かされています。病院での充実した仕事はとても魅力的でしたが、ある当直中に13トリソミーで生後2日に亡くなった男の子を担当したときに、ああ、自分も生かされている、そしていつかは死ぬんだと気づきました。じゃあ、今日与えられている自分の人生をどう生きようかと考え、専門医取得を機に、思い切ってイギリス留学し聖書を学び、リバプールで熱帯小児医学修士を取り、ミャンマーに来ました。

お裁縫クラブや移動診療では孤児院で育った青年たちを雇用してサポート兼仕事をしてもらっています。長い間大事に育ててきたのに窃盗を繰り返す子、急に仕事にぱったり来なくなる子もいます。そんな子たちは解雇し、もっとしっかり働ける子をと何度思ったことでしょうか。それではいったい私は何をしに来ているのかとふと思いました。期待できる子だけかわいがるのは誰にでもできます。繰り返しても赦していこう、それは、自分も失敗を何度もしながらここまで来たことを思い出したからです。その後、窃盗をしていた子は、反省のために田舎へ送られましたが、今年になって「先生、私をありのままに受け入れてくれてありがとう」と手紙が来て、今は孤児院の子どもたちの面倒を見るお姉さんになっています。一人の人が愛されて、変わっていく姿は何にも代えられないものです。

前橋日赤で講演させていただいたときに、「日本の子どもたちに比べて、ミャンマーの子どもたちの目がキラキラしているのはどうしてだと思いますか」という質問がありました。ミャンマーでは、両親がいない、ご飯も食べられるか、学校に続けて行くことができるか心配している子どもたちがたくさんいます。日本はなんでもあることが当たり前で、一つでも欠けると文句を言いたくなるのですが、ミャンマーでは逆になので、与えられている一つ一つのものをありがとうと感謝するからでしょうか。人の幸せはものの豊かさではなく、それをどう受け止め感謝するかなのではないかと思いました。子どもたちのための支援をしいっている私ですが、かえってこうした子どもたちにたくさんのことを教えられ、彼らの笑顔に励まされエネルギーをたくさんもらって今日も活動を続けています。

著者略歴： 荒川 泰子（あらかわ やすこ）

1998年山形大学医学部卒業後、群馬大学小児科入局、その後2002年まで佐久総合病院小児科勤務。リバプールにて熱帯小児医学修士取得後、2007年よりマンマーコンパッションプロジェクトにて150の孤児院の子どもたちの健康診断や健康教育に携わる。LILY Handicraft（お裁縫プロジェクト）を立ち上げ、孤児院の女の子たちの全人的なサポートや医学生への聖書研究会も開催している。

～ 男女共同参画推進委員会より ～

「真のキャリア形成とは」

世界で初めて医師として認められた女性“エリザベス・ブラックウェル”の言葉に「人類の半数である女性は、やがてもう半分の男性と対等にみられる時代が遠からずこのアメリカに来るでしょう！」とあります。この初の女性医師が誕生し200年近くが経ち、ようやく、この“遠からず”が日本にも“少しだけ”あてはまる様になってきたようです。これまでのリレーコラムからは“真のキャリア形成とは”男女に関係なく個々の強い信念から形成されてくるようにも見受けられます。今回の荒川先生の投稿を見ていて、以前にテレビで取り上げられていたザンビアで医療活動を行っている女性医師山元香代子さんのことも思い出されました。どちらの先生にも共通するのは、強い信念を持ち、意志が強く、自ら人生を切り開いているところでしょうか。このような強い信念を持った医師（特に女性医師）のキャリア形成の芽を摘んでしまうような環境や制度は改善しなければいけません。それが私達の仕事です。とはいえ、若い先生方には、是非“男女を問わず”どのような医師になりたいのか？と自問しながら、信念を持って突き進んで欲しいと期待するところです。